

ヨーロッパの民族学

——ジャン・キューズニエとマルティヌ・セガレンの『ヨーロッパの民族学』再考——

民族を定義することは、むずかしい。ごく一般的にいえば、「同じ文化または生活様態を有する人間集団」（平凡社『世界大百科事典』）くらいが妥当である。しかし、「同じ文化または生活様態」とは何だろう。

それはまず、言語ではない。周知のとおり、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのセルビア人とムスリム人は、同じセルビア・クロアチア語を話しながら、みずからのアイデンティティのために命がけで戦っている。

それはまた、宗教でもない。多くの近代社会では信仰の自由が保障されている。現代の日本人は、何を信じていても、自分が日本民族の一員であることを疑わない。

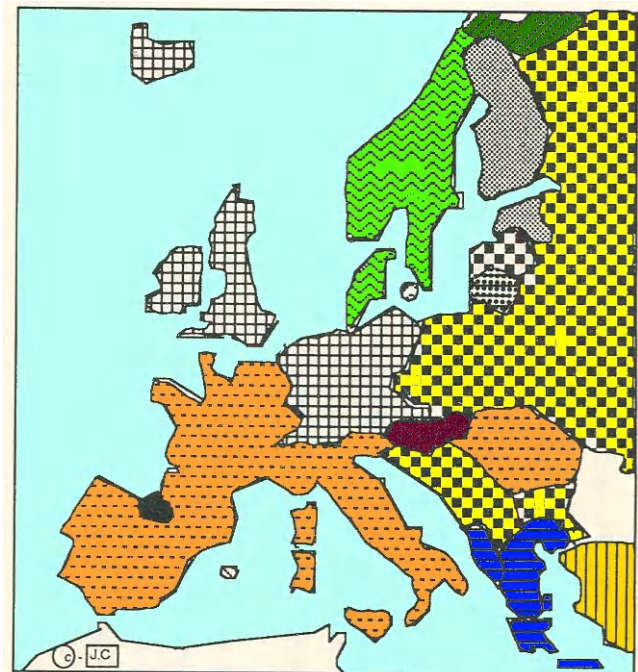
生業や親族組織も民族の決め手にはならない。都市化の進んだ今日では、同一民族のあいだにもさまざまな職業があり、結婚の形態がある。

バスク人は、一方で伝統的な漁法や家族制度を大切にしますが、同時に先端技術の工場でも働き、高層アパートに住んでいる。いまや生業や親族組織が均一な民族の方が稀なのである。

さらにまた、居住地も決め手にならない。ユダヤ人やロマの人々（ジプシー）は、世界各地に分かれ住みながら、みずからの民族性を忘れることはなかった。

つまり、それぞれの民族が、それぞれのアイデンティティ確認装置をもっているのだ。

民族に歴史があり、現実があるように、民族学にも歴史と現実がある。ヘロドトスの『歴史』やシーザーの『ガリア戦記』の時代から、ヨーロッパ民族のあいだの差異は文字によって記録されてきた。しかし民族が本格的な研究の対象とされたのは、近代以降のことで



	ラップ文化圏		スカンディナヴィア文化圏
	ギリシア文化圏		スラヴ文化圏
	ロマンス文化圏		フィン・ウゴル文化圏
	ゲルマン文化圏		トルコ文化圏
	バスク文化圏		リトアニア文化圏

ヨーロッパの言語と民族

ある。中央集権的な国家の誕生とともに「国民」と「民族」と「人種」の葛藤が鮮明になり、ケルト主義、ゲルマン主義、スラヴ主義といった各種イデオロギーが台頭した。

民族学が、失われた民族遺産の称揚や、民族の優越性の神話や、人種差別から解放されるためには、なお時間が必要だった。ここでキューズニエが目指す民族学は、イデオロギーを乗り越え、文化の相対性を認め、それぞれの民族文化を価値あるものとして、民族間の差異と同一を記述するものである。

インド・ヨーロッパ語族の発見は、一方で「アーリア民族の優越」という忌まわしいイデオロギーを生み出しはしたが、ヨーロッパ民族文化の解明のために決定的な役割をはたした。

少なくとも紀元前三千年ごろには、この言語共同体が出現し、インドからバルカン半島までにいたる広大な地域に、ギリシア語、ラテン語、ゲルマン語、スラヴ語、ケルト語などを派生した。もちろん、この地にはサーメ人（ラップ人）やバスク人のような先住の民族があり、フィン・ウゴル系民族やトルコ系民族のような後発の民族もあった。しかし、インド・ヨーロッパ民族の存在は圧倒的である。

	フランス語	スペイン語	ロシア語	ギリシア語	イギリス語	ドイツ語	ペルシア語	ベンガル語
1	un	uno	odin	ena	one	eins	yek	ek
2	deux	dos	dva	dio	two	zwei	do	doi
3	trois	tres	tri	tris	three	drei	se	tin
4	quatre	cuatro	tchetyre	tesseris	four	vier	chahar	shar
5	cinq	cinco	piat	pende	five	fünf	pandj	panch
6	six	seis	shest	hexi	six	sechs	shish	chhoy
7	sept	siete	siem	hefta	seven	sieben	haft	shat
8	huit	ocho	vosiem	okto	eight	acht	hasht	at
9	neuf	nueve	deviat	enia	nine	neun	now	noy
10	dix	diez	desiat	deka	ten	zehn	dah	dosh
100	cent	ciento	sto	hekto	hundred	hundert	sad	shot

	フランス語	ラテン語	イギリス語	ドイツ語	ロシア語	ペルシア語	ヒンディー語
父	père	pater	father	Vater	(atets)	pedar	pita
母	mère	mater	mother	Mutter	mat'	madar	mata
兄弟	frère	frater	brother	Bruder	brat'	baradar	bhrata
姉妹	soeur	soror	sister	Schwester	siestra	khahar	(behan)

＜インド・ヨーロッパ言語の対照＞

インド・ヨーロッパ民族には、大きくいて二つの系統がある。第一の系統は、古代ギリシア・ローマ文化の継承者であり、これはさらに二つに分かれる。

一つは、西ローマ帝国の文化を受け継いだイタリア、ルーマニア、フランス、スペイン、ポルトガルなどのロマンス文化圏。もう一つは、東ローマ帝国に連なるギリシア・ビザンチン文化圏である。こちらは、ギリシア正教を通じてギリシアから小アジア、エジプト、ウクライナ、ロシアなどに浸連していった。

インド・ヨーロッパ民族の第二の系統は、古代ギリシア・ローマ文化と戦った「蛮族」（バルバロイ）の文化の継承者で、大きく五つの文化圏に分かれる。第一はケルト文化圏。かつて、ヨーロッパの大陸邦を広く支配していたこの文化は、現在アイルランド、スコットランド、ウェールズといった島々に残され、大陸ではわずかにブルターニュ半島に伝えられているにすぎない。第二のゲルマン文化圏、第三のスカンディナヴィア文化圏、第四のスラヴ文化圏、第五のバルト文化圏については、多くの説明を要さない。

こうした歴史をもつヨーロッパ民族と民族学は、新しい現実に直面している。たとえば、

旧ソヴィエト連邦と東欧諸国の体制の崩壊、ドイツ、フランスなどにおける移民や外国人労働者の問題、ECという新しい共同体の創設などがそれである。

旧ソヴィエト連邦が社会主義のイデオロギーを堅持していたころ、連邦の各民族はそれぞれ独自性を保ちながら、「ソヴィエト国民」という民族と国家を超えた立場に立ち、共通のソヴィエト文化の発展に寄与するはずであった。

ところが、この「ソヴィエト化」の内実は、今日ますます明らかになってきているように「ロシア化」にすぎなかったのである。連邦内で公然と行なわれた先住民の強制連行とロシア人の移住、移民による人為的な人口操作や、バイリンガリズムの美名のもとに強行されたロシア語学習の押しつけは、バルト三国をはじめとする各共和国に住む諸派族のアイデンティティを危機にさらした。

しかし近代国家が、みすげえ掲げた理想のもとに、域内の周縁的な文化のアイデンティティを侵すのは、なにもスヴィエトにかぎったことではない。スペインにはバスク、イギリスにはアイルランドの独立運動もあり、フランスにもブルターニュ、コルシカなどの地域紛争がある。ヨーロッパが、ECという新しい共同体の創設し、さらなる統合に向かおうとする現在、こうした「国家」と「民族」の力学は軋みながら、新しい均衡を模索しているように見えるが、予断は許さない。

東西ドイツの壁の消滅も、こうしたヨーロッパ新時代の象徴的な出来事だが、そこから生まれた大量の失業が外国人労働者の排斥という、思わぬ結果をもたらした。「三代さかのぼれば、三人に一人は外国人の先祖に出会う」という「移民大国フランス」にも、外国人排斥の嵐が吹き荒れている。

戦後の経済復興・成長期には、むしろ歓迎された移民労働者が、経済の停滞とともに敵対視され、移民法や国籍法の見直しが始まったのだ。

こうした現状を前に、文化相対主義に基礎をおき、民族間の差異を尊重し、「差異への権利」を主張する

ヨーロッパの民族学は、無力である。

アラブ系の移民の多くが標榜する価値は、多くの点でフランスをはじめとするヨーロッパ近代国家の基本理念と背馳する。本書におけるキューズニエの記述も、この点ではまったく迫力がない。イスラム文化をそのまま容認することは、フランス革命以来の人権思想の根幹と共和国の存立をあやうくするのである。

フランスに最も多いアラブ系移民は、アルジェリア人とモロッコ人とチュニジア人であり、旧フランス植民地出身の人びとであることも忘れがたい。そして今日、最も激しく移民の排斥を訴えているのは、「ピエ・ノワール」と呼ばれる植民地からの引き揚げ者である。移民問題は、日本における在日韓国・朝鮮人の問題と同じく、過去の植民地主義に根ざしているのである。

民族の歴史と現実とは、決してイノセントなものではない。ここでもまた、民族を相対的に孤立したものと考え、フィールドワークを主軸として、記述に専念してきた民族学の

在り方が問われている。

しかしその一方で、民族学の映し出す多様なヨーロッパの姿は、軽視されてはならない。今日までの日本のヨーロッパ理解は、ほとんどすべてが、近代とともに成立した歴史・社会・地理の枠組みにとらわれていたといつてよい。

この枠組みはそのままヨーロッパの自文化理解の枠組みでもあった。旧来のヨーロッパ民族学は、主としてヨーロッパ近代からほぐれた、国家という装置をもたぬ未開民族に向けられていたのである。民族学は、みすがらの外側に位置する、異民族文化の不条理を解きあかし、よりよく支配し、同化するための道具であったのだ。

キューズニエらの掲げた「ヨーロッパの民族学」は、これまで外側に向けられていた視線を内側にもどし、みすがらの多様性を知ることがを標榜している。既成の国家や共同体の枠組みにとらわれず、料理や結婚や居住のシステムを検証し、構造を明らかにしていくこと。民間信仰や口頭伝承などのフォークロアの広がりを記述し、データをストックすること。古い儀礼が姿を消した社会で、いかなる新しい儀礼が生まれつつあるか、その機能を解明すること。これらは、たえまない解体と再構築をくりかえす新しいヨーロッパを理解するために、不可欠な作業の一つであるとする。

この小論は、”Jean Cuisenier & Martine Segalen, *Ethnologie de l'Europe*, P.U.F, 1990” を訳出したさいに書いた<後書き>に加筆したものである。(『フランスの民族学』白水社 参照)